

鶴丸倉庫の構造と意匠

- 平成14～16年度建造物調査からの報告 -

正見 泰

1 鶴丸倉庫とは

鶴丸倉庫（写真1）は、その名称とは異なって、金沢城内の東ノ丸附段と呼ばれる曲輪に建てられた大型の城郭土蔵である。桁行21.840m、梁行14.560mの腰平石貼り土蔵造の総二階で、建築面積333.45㎡、延床面積635.98㎡（下屋は除く）あり、棟高9.048m（最高高さ9.76m）、切妻の棧瓦葺きの鞘屋根を持ち、建物周囲に雨落溝が巡っている。西面妻入りで、2つ並んだ出入口を覆うように棧瓦葺きの下屋が付加されている。この下屋は平成13年の修理に際して整備されたもので、当初のものでも復元されたものでもない。

なお、広島大学の三浦正幸氏によれば、現在全国で、江戸時代のまま城内に残っている城郭土蔵は、大阪城金蔵、二条城に米蔵3棟、高知城本丸納戸蔵があり、これに明治以降城内で移転された宇和島城の旧武器庫、正確には土蔵ではないが石垣造（穴蔵）の大阪城焔硝蔵を含め7棟ほどが残っているだけだとされている⁽¹⁾。

平成14年度から今年度までの間に、金沢城の建造物基礎的調査として、鶴丸倉庫に関する現地及び史料調査を当室で行った結果、新知見等がまとまって得られたので、今回その概略を報告する。



写真1 現況の鶴丸倉庫

2 これまでの研究

櫓、城門等の城郭建築⁽²⁾や御殿建築は図面類が比較的多く残されているのに対して、土蔵に関しては残されている史料が少なく、現在の鶴丸倉庫に関しては平成2年まで史料が調査されておらず⁽³⁾、その後に新たな史料の発見もなかった。そのため、鶴丸倉庫に関する文献としては、県土木部から金沢工業大学建築史研究室に依頼し、竺 覚暁氏、中森 勉氏、富島義幸氏が調査した、「金澤城址鶴丸倉庫及び第六旅団司令部の建築調査所見と方針（平成12年1月）」（以下、『所見』とする。）がまとめられているだけである。

この調査では、棟札等が発見されなかったため、創建年代を特定するに至らなかったが、鶴丸倉庫の沿革について、竺氏等は、「鶴丸倉庫の建立年代を直接に知る史料は見いだせない。ただし、明治

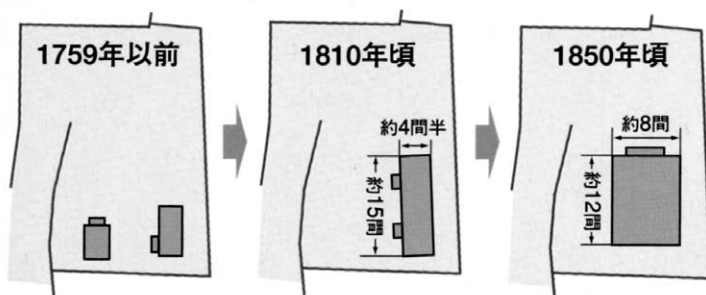


図1 東ノ丸附段土蔵の変遷図

「御城分間御絵図」
に描かれた鶴丸倉庫
（前田育徳会蔵）

写真2

5年(1872)に旧陸軍が管理するようになってからの史料が『建造物履歴表』(昭和16年成立で、以降これに新たな記事が書き加えられている。以下『履歴表』とする。)に残る。ここでは「被服庫」と呼ばれ、「土蔵造二階家」とされ、昭和16年頃の状態を示すと考えられる平面図が付属する。」と述べている。

また『所見』の中の総合的所見で、「鶴丸倉庫の構造・技法をみるならば、在来の土蔵や、おなじく金沢城内に残る藩政期の建築とも共通する点が多々みうけられ、同じ建築技術の系統に属するといえる。洋風トラス等、旧陸軍が建設した西洋から新たに導入された構造・技法を用いる建築とは異っており、旧陸軍の建設したものとはみなし難い。以上から判断するならば、鶴丸倉庫は成巽閣蔵金沢城絵図の成立以降、藩政期末期の建立とみなすのが最も妥当であろう。」と結論づけた。

ところが、平成14年度の当室の絵図調査で、「御城分間御絵図」(前田育徳会所蔵 写真2)は、竺氏等が「成巽閣蔵藩政期末の絵図」と言及した金沢城絵図よりも描写年代が新しく、弘化2年(1845)から嘉永3年(1850)の頃の様子が描かれていることを確認した。さらに、当室の研究紀要第2号⁽⁴⁾の「金沢城全域絵図の分類と編年 - 金沢城絵図調査報告Ⅰ - 」で既に報告したように、当室での資料整理の過程で、この絵図の東ノ丸附段には、現在の鶴丸倉庫と位置及び平面規模が合致する土蔵が描かれていることが、室員によって発見された。確認のために鶴丸倉庫の実測調査を実施した結果、江戸時代に建設されたことがはっきりした(図1)。

3 成巽閣土蔵との比較

3-1 成巽閣土蔵とは

成巽閣は、文久3年(1863)に13代藩主斉泰が継母である真龍院の隠居所として、竹沢御殿跡地の一郭に建てた巽御殿を始まりとする。成巽閣の建つ敷地は、御殿建築と庭園からなる数寄の要素を持つ御殿空間であるが、今も残る辰巳長屋や通りに面する塀の構造・意匠が、金沢城内の櫓や太鼓塀のものと共通しており、金沢城の出丸的な性格も感じられる。成巽閣土蔵(写真3)は、巽御殿の敷地内に建てられた土蔵で、現在公開されていないが、昭和58年県指定の有形文化財となっており、桁行19.69m、梁行9.85m、建築面積211.21㎡、延床面積387.89㎡の総二階建てで、規模は鶴丸倉庫の3分の2程度である。平入りである点、棧瓦葺き鞘屋根の形状が寄棟である点が、鶴丸倉庫との目立った相違点である。



写真3 現況の成巽閣土蔵

また、田中俊之氏によれば成巽閣土蔵は、「文久3年(1863)の巽新殿(現在の成巽閣)建立の際に、現在位置に築造されたもので、それ以来、大修理も大改造も行われず」、「外部は白漆喰塗、腰越前石平貼り、基礎は亀甲石積み二段で、葛石とともに戸室石を用いている。」とし、「格式高く優れた伝統的手法で造られており、規模も大きく、この種の土蔵の典型的な遺例として重要な建築である。」とされている⁽⁵⁾。

このように、成巽閣土蔵は鶴丸倉庫よりも15年ほど後の建築物ではあるが、同じ頃に加賀藩によって建築されたことが明らかな金沢城関連の土蔵であることから、比較対象として現地調査を行った。

3-2 構造の比較

屋根はともに、土蔵建築ではしばしばみられる鞘屋根となっている。しかし、数寄の要素を持つ空間に建築された成巽閣土蔵が寄棟形式を採用しているのに対して、城郭内に建築された鶴丸倉庫は一

般的な切妻形式となっている。

架構は、建物の外壁では半間ごとの柱を全周に立てている点は同様であるが、鶴丸倉庫の梁行方向は成巽閣土蔵に対して1.5倍大きくなっているため、桁行方向だけでなく梁行方向にも内部の2間ごとに9本のより太い独立した柱⁶⁾を立て梁・貫で繋ぎ、中央の柱上に舟肘木をおいて棟木等を受ける、と言う独特の工夫がなされている。一方、成巽閣土蔵も桁行方向、大棟の下に独立柱を立て棟木を受けているが、船肘木は使用していない。

1階床は、地盤面を建物周囲の地面からやや嵩上げた上で、礎石の上に短い床束を立てて支えている点や、石造の基礎部分に換気口を設けて床下換気を図っている点は同様である。ところで今回の調査中

に、換気口の蓋が、成巽閣土蔵では外側に石製の片引き戸式で設けられているのに対し、鶴丸倉庫では、現在は失われていて材質は不明ながら、外側に上げ下げ式(写真4)で設けられていたことが判った。鶴丸倉庫のような上げ下げ式の換気口の蓋⁷⁾は、第六旅団司令部なども含め、現存する城内にあったいずれの建築物にも見ることはできない特殊な方式である。



鶴丸倉庫の床下換気口

写真4

3 - 3 外部意匠の比較

外壁は、腰部分の高さが異なるものの、ともに表面が平滑で矩形の板状の石⁸⁾を垂直方向に通った位置で菱形の金物を使って押さえ、腰より上部は塗籠の壁としている(写真6)。さらに、基礎部の石積み⁹⁾と雨落溝の縁石(葛石)には、戸室石を使用している点も共通する。

また、開口部に関しては、窓には同じ意匠の装飾的な枠を漆喰で造形し、鉄格子を入れている点や、窓の内側には片引きの土戸を備え、外側には取り外し可能な板葺きの庇が付けられている点¹⁰⁾も共通する。しかし出入口の扉は、鶴丸倉庫の2箇所ともが片引き土戸¹¹⁾であるのに対し、成巽閣土蔵では両外開きの土戸(扉)である。金沢城内で両外開きの土戸(扉)の例は、三階櫓の出入口に使われていたことが判っている。ちなみに現存する三十間長屋の2箇所の出入口はともに両引き土戸であり、石川門の3箇所の出入口は総て片引き土戸である。金沢城では出入口の戸を特定の形式に限定したわけではなく、様々な形式が見られるが、それらの形式によってどのように差別化が図られていたかについては今後分析を行いたい。

今回の鶴丸倉庫と成巽閣土蔵の比較調査からは、建築された空間の違いによって細部には異なっている点が見られるが、全般的には構造・材料や意匠に共通性を持っていると言える。

4 陸軍の建築した土蔵との比較

大正11年(1922)に陸軍が建築し、昭和47年に金沢大学から(株)百萬石文化園に売却された土蔵風の建物(以下、単に土蔵とする。写真5)が存在したことが、金沢大学の資料(用途廃止の起案及び購入者が提出した解体撤去届)から判明した。現在は金沢湯涌創作の森(金沢市所有)となっている当時の檀風苑に移築され、今でも金沢湯涌創作の森の施設として活用されていることも判った。しかし、所有者の市の話では旧檀風苑の建物であった当時から壁体がブロック造になっていたとのことで、旧檀風苑への移築に際して、以前通りに修復して保



写真5 城内にあった当時の陸軍の土蔵
(奈良文化財研究保管写真)

存されたのかについては疑問が残る。

ともあれこの土蔵は、鶴丸倉庫に比べると半分以下の規模で、建坪135㎡、総二階建て平入りで、二ノ丸の極楽橋袂付近に建っていたことを、前出の陸軍の『履歴表』や、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所保管のガラス乾板写真などで確認した。しかし、前述したように、創建時の通りに移築されている確証がないため、城内にあった当時の写真により外観のみの比較を試みた。2階の窓廻りの漆喰造形の意匠、庇を取り付けるための金具は、鶴丸倉庫と共通している。一方、外壁の腰が海鼠壁⁽¹²⁾になっていることが外観上の大きな違いである。また窓の防火戸形式が鶴丸倉庫や成巽閣土蔵では1、2階とも内片引き土戸であるのに対して、陸軍の土蔵では少なくとも2階の窓には両外開きの土戸（扉）が付けられている点が異なっている⁽¹³⁾。なお鞘屋根であったかどうかや換気口の状態については、写真では確認できなかった⁽¹⁴⁾。

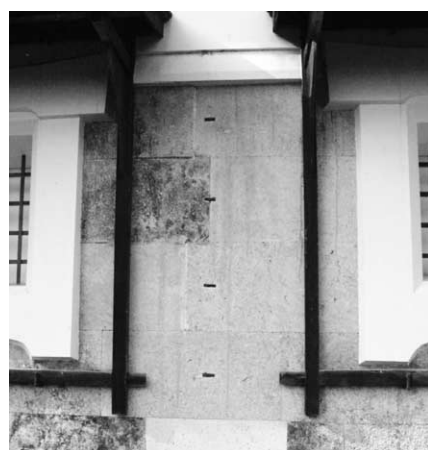
今回の調査では、現在も残る陸軍の土蔵については、限定的な比較であるが、鶴丸倉庫とは外壁腰の材質、窓防火戸の形式のような重要な点で相異が見られることが判った。

5 腰の石貼りに関する新知見

鶴丸倉庫と成巽閣土蔵の比較で、外壁腰の石貼り（写真6）を外部意匠の共通点として挙げたが、加賀藩が建築した城郭土蔵に共通する特徴であったと考えられることが判った。文化大火（1808）後の二ノ丸再建時の造営記録である「御造営方日並記（以下、『日並記』とする。）⁽¹⁵⁾」には、土蔵の腰の石貼りに関して、文化6年（1809）正月6日の項に「御居間先土蔵腰板石、鶴川石為持届候由、越前二無之而八不宜故、右八御広式胎内二用ヒ、越前之分詮議、村田三郎兵衛へ申談也」、同年5月4日に「御土蔵腰石」の記述が、また材料に関して「越前腰石」や「越前板石」の名称が他項にも見られる。このことから、外壁の腰を海鼠壁とする長屋（加賀藩では長細い形状の平面を持った櫓を「長屋」と呼んだ。）に対して、城郭土蔵の外壁腰を越前石で平貼りすることが、少なくとも文化年間には加賀藩では一般的になっていたことが窺える。

また、『日並記』上巻の中には「越前腰石」や「越前板石」の規格（長さ×幅×厚）が複数見られ、3尺×1尺2寸×2寸5歩、3尺×1尺2寸×3寸、3尺×1尺5寸×2寸5歩、3尺2寸5歩×1尺5寸×2寸5歩、3尺2寸5歩×1尺5寸×4寸、4尺2寸5歩×1尺5寸×2寸5歩、の6通りが確認され、長さ3尺～4尺2寸5歩（約90.9～128.8cm）、幅1尺2寸～1尺5寸（約36.3～45.5cm）、厚さ2寸5歩～4寸（約7.5～12.1cm）の石材を使用していたことが判った。

そこで、実際の鶴丸倉庫外壁の腰に使われている板石について、後世に修補したと明らかに思われる石を避け、無作為に数枚を選んで計測したところ、長さは82.2～90.5cmで90cmを超えるものはほとんど無く、数値にはかなりばらつきが見られた。一方、幅は39.3～43.5cmで、大部分が41.5～43.5cmの間で比較的揃っていた。厚さは正確な計測は難しいが、見え掛かりで厚みと考えられる部分を計測したところ7.2、7.7cmのものがあつた。このことから、長さはやや短めながら、鶴丸倉庫でも規格 ないし に近い石材が使われていることが判った。



鶴丸倉庫の外壁腰の板石

写真 6

6 今後の調査展開

今回の調査により、鶴丸倉庫は、全般的には江戸時代に建築された「土蔵型土蔵」⁽¹⁶⁾が共通して持

つ構造・材料や意匠の特徴を持っており、明治以降に城内で陸軍が建築した土蔵とは関係が薄いと言える。このほかに、『履歴表』記載の計3箇所増設された非常口は、その付属図面でも、現状の鶴丸倉庫でも確認することができ、『履歴表』にある「被服庫下家共」が鶴丸倉庫であることが確認された。また、壁にそって棚が設けられていたことを示す痕跡、衣服をかけるための棹や、東北隅にあった小階段等の明治以後の改造が竺氏等の調査で既に指摘されたが、今回の現地調査で、現在も残っている階段も改造されていることが新たに指摘された。なお、床下換気口が増設されている⁽¹⁷⁾こと、2階床に空けられた荷物の揚げ降ろし用と思われる小穴(91cm×88cm)は、創建当初から設けられていたと推測されること、西面2階窓下に部分的に存在する下見板張り部分は、「御城分間御絵図」に描かれた土蔵の下屋部分の位置と一致しており、創建当初の下屋の取り付け部分であったと考えられることが、当室が昨年度行った調査で明らかになった。

これまでは、櫓(「長屋型土蔵」⁽¹⁶⁾を含む)、城門や城壁のような城郭建築であれば、指図や起絵図などの建築図面類が比較的に残っており、その変遷を詳しく知ることができるのに対して、金沢城の城郭土蔵の建築図面類は数が少なく不明な点が多かった⁽¹⁸⁾。しかし、『日並記(文化6年2月18日など)』には、城郭土蔵である御居間先土蔵の建築図書が、城方に差し出されたことが記されており、城郭土蔵の建築図面類も城方で保管されていた可能性があることが判った。今後、鶴丸倉庫を始めとする城郭土蔵の建築図面類が新たに発見され、藩政期の用途や、現在の鶴丸倉庫への建替経緯などが確認されることが期待できる。

また今回、『日並記』上巻の記述から加賀藩の城郭土蔵に関する新発見のいくつかの概略を報告することができたが、本年度末に刊行される下巻からも、金沢城の建造物に関してさらなる建築学上の発見が期待される。

<注>

- (1) 三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』(至文堂 1999)
- (2) 注の(1)の著作によれば、城郭建築は武家諸法度による建築の制約を受けた。これに対して、城内にあっても居住用建築物(御殿や土蔵など)は、武家諸法度上の制約を受けなかったとされる。
- (3) 『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ(金沢城史料編)』(石川県教育委員会 1991)。また、この時発見された史料が、後述の『所見』でも引用している、金沢師団経理部作成の『建造物履歴表』及び『建物臺帳(付属図面)』(1941 発見時大蔵省北陸財務局所有、現在は石川県立歴史博物館所蔵)である。
- (4) 研究紀要『金沢城研究 第2号』(石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004)2章
- (5) 『石川県の文化財』(石川県教育委員会 1985)
- (6) 桁行方向は、3間間隔で独立柱が立っている。
- (7) 「御造営方日並記(注の(15)参照)」の中に、「御居間先御土蔵、最前八土台居二候所、此度風抜出来、惣盤入用之旨、」や「御大蔵風抜蓋銅渡鉄留」の記述が見られ、この「風抜」は建設の過程から判断して床下換気口を指すものと思われ、加賀藩の土蔵には、床下換気口及びその蓋が文化年間以前から備えられていたことが判る。また「風抜蓋銅渡鉄留」の『鉄』については、鶴丸倉庫と同型式の換気口において、上げた状態(開口状態)の蓋を留めておくために使われる金具のことではないかと推測している。
- (8) 越前産の笏谷石と考えられる。
- (9) 積み方は異なり、鶴丸倉庫は見え掛かり1段で、大きめの矩形の戸室石を横に並べている。これに対して、数寄の空間にある成巽閣土蔵では、基礎部分の石を亀甲積みとすることによって、意識的な化粧を施したことが読み取れる。
- (10) 成巽閣土蔵では庇自体は失われていてその形状は不明だが、土蔵外壁面に鶴丸倉庫と同様の取付金具が残っている。なお、このような窓の漆喰造形や脱着可能な庇は、櫓の類には見られず、むしろ県内では町方

の土蔵でもしばしば見られる。

- (11) 大型のためか1枚の戸に対して、引手金物が2箇付けられた特徴的な土戸である。
- (12) 少なくとも腰の下1段は、材種不明ながら平石貼りのように見える。
- (13) 1階の窓には外扉は無いように見える。金沢城の藩政期の建築物で、窓に外開き扉形式の防火戸を設けた事例は見つかっていない。
- (14) 現状は、切妻鞘屋根、木構造、二階建て、外壁の立ち上がり部分（基礎を含む）に赤戸室を2段に平石貼しており、床下換気口はない。また、1階の窓には外開防火扉はつけられておらず、漆喰による枠も単純な四角形である。
- (15) 本報告で使用した『日並記』の記述文に関しては、金沢市立玉川図書館所蔵の原本を翻刻した、金沢城史料叢書1『御造営方日並記 上巻』（石川県教育委員会文化財課金沢城研究調査室 2004）に依った。
- (16) 江戸時代の金沢城内に建築された建物の中には、名称が土蔵であっても、御難土蔵のように長屋として扱われるものもあり、この場合は外壁腰が海鼠壁で長屋と同じ意匠となっている。本報告ではこの種の土蔵を「長屋型土蔵」と呼び、居住用（注の（2）参照）とされた「土蔵型土蔵」と区別する。金沢城で城郭土蔵と言った場合は、総べて「土蔵型土蔵」を指すことになるが、成巽閣土蔵は「土蔵型土蔵」であっても、城郭土蔵とは呼び難いので、城郭土蔵と「土蔵型土蔵」も使い分けた。
- (17) 今回の調査で、上げ下げ式の蓋付換気口の外に、明らかに竣工後に増設されたと思われる、工作が粗野な蓋無しの換気口も見つかっている。このことは、鶴丸倉庫の使用開始後に床下換気の強化を図った証左であり、湿気対策の必要な状態にあったと考えられる。
- (18) 城絵図でも、城郭建築や御殿建築については柱割りや内部区画まで描かれている例が多く見られ、床仕上がりまで判るものも存在するが、城郭土蔵についてはほとんどの場合、外形線を示すだけである。